



GLOBAL NEXTLEADERS FORUM

2019年度報告書

2020年3月

グローバル・ネクストリーダーズフォーラム学生本部

目次

1. GNLFについて

- 1-1 会頭挨拶
- 1-2 理念
- 1-3 運営メンバー
- 1-4 スポンサー

2. GNLF2020概要

- 2-1 本会議概要
- 2-2 参加者出身国・大学
- 2-3 テーマについて

3. GNLF2020本会議

- 3-1 開会式・基調講演
- 3-2 パート0

3-3 家族パート

3-4 中規模パート

3-5 国パート

3-6 パート結び

3-7 文化交流会

3-8 閉会式・報告会

3-9 参加者感想

4. 会計

4-1 会計報告（収入）

4-2 会計報告（支出）

5. 連絡先

5-1 連絡先

1-1 会頭挨拶

グローバル・ネクストリーダーズフォーラム学生本部(以下、GNLF) は2019年4月に新体制にて発足し、1年間活動を続けてまいりました。その集大成となるGNLF2020本会議を無事開催することができたのは、ひとえに皆様のご支援・ご協力の賜物であり、深く感謝申し上げます。

弊団体は2010年の設立以来、次世代のグローバルリーダーを育成するプラットフォームの提供を目的に、世界各地から学生が集う国際会議である本会議を実施してまいりました。国籍、年齢、専攻を含めて異なるバックグラウンドをもつ学生が一堂に会することで、グローバルリーダーとして必要な素養を育み、今後の進路について新たな発見や刺激が生まれることをひとつの目標として私たちは活動しております。それらが達成されるよう、本年度の本会議でのプログラムも時間をかけて丁寧に設計してまいりました。

過去数年の共通する反省として、団体内で議論を重ねているうちにプログラム作成が本会議直前まで延び、逼迫したスケジュールとなってしまうということがありました。この反省を踏まえ、本年度は昨年度のように作成開始の遅れによって本会議直前になって積み重ねてきたものを大幅改定するより、ゆとりをもって作成した方が結果として充実したプログラムになるとの考えのもと、プログラム作成開始時期を前倒しし、例年に比べ余裕をもって作り終えることができました。時間をかけて作った結果、議論の方向性を示すことができ、議論が発散することなく概ね意図した通りに議論が達成され、各国の学生から多様な考えを引き出すことができたと考えております。

さて、2017年度以降の大幅な運営体制の変更により、団体の運営方法が3学年制が2学年制になりました。過去3年間にわたり2学年制で活動してまいりましたが、入れ替わりの早さからその弊害が徐々に表れており、感じております。1年生は春に加わった後、冬までの約1年間団体の根幹をなす本会議を経験せず活動し、この活動の醍醐味を年度の最後に理解するため、モチベーションの維持や団体への所属意識の形成が難しいのが現状です。また、執行代である2年生についても1回目の本会議を通して雰囲気をつかんだあとは、自分たちの本会議をつくと同時に、後輩の育成にも多大な時間をかけなければなりません。こうした状況に加えて、本年度は2年生が例年に比べ少なかったため、1人当たりの負担が大きくなり、私たちが理想とする本会議の質の担保が大きな課題となっております。そこで、来年度からは私を含めた3年生に上がる者も運営メンバーとして残り、漸次3学年制に戻す予定です。これにより、中心となる2年生の負担の軽減と円滑な運営を可能とし、本会議の質の向上に今まで以上に取り組むことができます。これからも変わらず向上心をもって取り組んでまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

改めまして、すべてのGNLFの活動は、協賛者・後援者の皆様、講師の先生方を始めとして、多くの方々のご協力の上に成り立っております。GNLFを代表して、深く感謝申し上げます。今期GNLFは3月に行われまして本会議最終日の報告会を以て終了いたしました。1年にわたって会頭を務めました、私、松本は3月をもちまして会頭職を後任の和久井に譲ることとなりました。運営体制の見直しは随時行われる予定ですが、上述のとおり私は来年度も運営に関わっていく所存です。今後とも、GNLFへの皆様の温かいご指導とご支援を賜れますよう、心よりお願い申し上げます。

2020年3月 GNLF 2019年度会頭

松本 泰平(東京大学 前期教養学部 2年)

1-2 理念

[団体理念]

グローバルリーダーを創出する。グローバルリーダーとは、国際社会という枠組みにおいて、団体としての方向性を決定し仲間に共有し、集団としての行動を統合し統御できる人物である、と私たちは考えます。リーダー育成の活動の軸として、GNLFでは毎年東京で本会議を開催します。本会議とは、GNLFの日本の運営メンバーが主催する年一度の国際学生会議です。

[目的]

他者理解による自己像の認識を本会議の目的とし、それを通じてグローバルリーダーの創出を達成したいと考えております。他者と深く交流し他者を理解することは、自分を知る契機となります。他人が自分をどのように捉えるかは人によって異なるため、価値観やバックグラウンドの異なる人と接することで、他人の自分に対する評価を知ることができます。この学びから、他人に信頼されるにはどのような言動を起こせば良いのか、またどのように自分の長所を活かし短所を克服することで他人に信頼されるかを知ることができます。他人から信頼を得ることはリーダーに不可欠な要素の1つです。このような他者理解の機会を本会議という形で経験することでグローバルリーダーに必要な他人からの信頼感の得方を身につけることができます。

[特徴]

GNLFの本会議の特徴は2点あります。

○ 多国間の枠組みであること。

政治的、経済的影響力の大小に関わらず様々な地域の様々な規模の国の参加者を募ることで、会議での前提が先進国視点、大国視点に寄らないよう綿密に参加国が選定されています。一般的に先進国からの参加者に偏ってしまうことの多い国際会議の中で、グローバル・ネクストリーダーズ・フォーラムは他の国際会議と一線を画しており、国の規模にかかわらず様々な国の参加者と交流することができます。

○ 1つのテーマを多角的に考察するやり方を学ぶことができること。

毎年1回開催される本会議において1つのテーマを決定し、そのテーマにそくしたセッションを行うことで様々な角度から1つのテーマについて考察することができます。そのテーマについての見識を深めることができるだけでなく、1つのテーマが与えられそれについて考察を加えていく際、どのようにそのテーマへの学びを深めることができるのかという学びの過程を経験することで、今後の学びでも大いに活用できます。

1-3 運営メンバー

【顧問】

遠藤貢（東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻、教授）

【10期（2019年度執行代）】

会頭

松本泰平（東京大学前期教養学部2年）

総務局長

矢野未菜（東京大学前期教養学部2年）

財務局長・プログラム局長

坪井宏樹（国際基督教大学教養学部2年）

渉外局長

大里優佳（東京大学前期教養学部2年）

阪口友貴（東京理科大学工学部3年）

陳遥知（東京大学前期教養学部2年）

【11期（2020年度執行代）】

小川優里（川村学園女子大学文学部1年）

亀田義勝（東京大学前期教養学部1年）

河野妃南（東京大学前期教養学部1年）

渋谷拓海（東京大学前期教養学部2年）

関根友里（東京大学前期教養学部1年）

谷口朋（東京大学前期教養学部2年）

田村裕加（東京大学前期教養学部1年）

六川雅英（東京大学前期教養学部1年）

和久井亮（東京大学前期教養学部1年）

1-4 スポンサー

【特別後援】



【助成】

公益財団法人 平和中島財団

公益財団法人 三菱UFJ国際財団

【協賛】



【寄付】

クラウドファンディング

【後援】



2-1 本会議概要

- 【期間】**

2020年2月23日~2020年3月1日
- 【開催地】**

東京
- 【宿泊地】**

国立オリンピック記念青少年総合センター
- 【会場】**

2020年2月23日:読売新聞東京本社ビル13階会議室

2020年2月26日:シャンクレール新宿

上記以外の日程:国立オリンピック記念青少年総合センター 研修室
- 【主催】**

グローバル・ネクストリーダーズフォーラム学生本部
- 【参加国・地域】**

ブルガリア・台湾・ハンガリー・日本・キルギス・メキシコ・パキスタン・チュニジア・スロバキア
- 【参加人数】**

本部運営委員:14名

日本人学生:3名

海外学生:19名

一部参加国の教員:4名(ブルガリア・パキスタン・チュニジア・スロバキア)

計40名

2-2 参加国・大学

- 【参加者出身国・地域】**

キルギス

スロバキア

チュニジア

日本

パキスタン

ブルガリア

メキシコ

台湾

ハンガリー
- 【参加者の大学】**

Institute of Business Administration (パキスタン)

Kyrgyz National University (キルギス)

Selye Janos University (スロバキア)

Sofia University (ブルガリア)

The National Autonomous University of Mexico (メキシコ)

University of Tunis (チュニジア)

University of Tunis El Manar (チュニジア)

University of Melbourne (オーストラリア)

University of Pannonia (ハンガリー)

大阪市立大学 (日本)

創価大学 (日本)

2-3 テーマについて

[議題選定理由]

近年、世界では目に見える形で社会に歪みが生じている。マクロな視点では米トランプ大統領の就任、イギリスのEUからの離脱は社会に大きな分断を生みだした。また、翻ってミクロな視点ではLGBTQ+と反対する勢力での対立も深刻であるのが現代社会だ。問題を単純化してみると、どれもコミュニティに生ずる問題として捉えることができ、コミュニティの抱える問題は、既存のコミュニティで生じている内部的な問題と新しいコミュニティの形成を阻むものの問題の大きく2種類に分けることができる。これらを総合的に議論することは現代社会の歪みを理解することができ、これから世界で活躍する学生が議論することには大きな意味があると考えた。

[GNLFがコミュニティを議題として扱う意義]

GNLFの理念は次世代のグローバルリーダーを育成するプラットフォームを提供することである。これから様々なコミュニティで活躍することが期待される学生がコミュニティの対立を軽減する上で何が必要かを考える一助となる。コミュニティは個人に価値観形成において非常に大きな影響を与える。当然のものとして享受してきたコミュニティからの恩恵を含めた影響について改めて考え直し、捉え直すことで、多様な考えとの出会いを生むことができる。

[参加者に期待する成果]

- 誰しもが所属するコミュニティというものを通して他者との類似と相違を知り、自らの価値観を相対化すること
- 異なる考え方をもつ人と接したときにどう反応するか、次世代のグローバルリーダーとして必要不可欠な他者理解の精神を養うこと

[本会議の構成]

GNLF2020 のテーマである「コミュニティ」は、“Part.1 家族”、“Part.2 地域社会”、“Part.3 国”の3つの部分から成り、多くの人にとっての価値観形成の場、そして居場所を与えるコミュニティに焦点を当てた。まず最初にコミュニティの最小単位である家族というミクロな視点、そしてその分析・考察をより拡張し地域社会や国というマクロな視点から社会的コミュニティについて考え、今後様々なコミュニティで活躍するグローバルリーダーとしての志向やあり方などについて考えるプログラム構成とした。

3-1 開会式・基調講演

[基調講演者紹介]

吉池亮様

読売新聞東京本社教育ネットワーク事務局長

1991年4月、読売新聞東京本社入社。2019年7月から現職。

2016年5月からニューヨーク支局長兼読売ニュース社

(読売新聞の米国子会社) 副社長。2015年4月国際部次長。

10代の読者に向けた「読売中高生新聞」の創刊に参画、初代編集長を務めた。取材記者としては東京地検を担当、東京地裁高裁で裁判報道に携わったほか、航空、運輸業界も長く担当した。国際事件では1995年ペルーの日本大使館人質事件や2001年のニューヨーク同時多発テロの余波の取材にあたった。



本会議の開会にあたり、2月23日に読売新聞本社ビルの会議室にて

- ・アイスブレイク
- ・開会挨拶
- ・基調講演（読売新聞社教育ネットワーク事務局長 吉池亮様）
- ・参加者・運営メンバー自己紹介

を行った。

開式前のアイスブレイクとして、参加者に名前と好きなものについて自由に自己紹介をし合ってもらったあと、ランダムに配布した参加者の名札を持ち主に返すゲームを行った。

開会式の冒頭では、本年度会頭の松本泰平より挨拶があり、プログラム局長の陳遥知より本会議の概観の説明が、渉外局長の大里優佳より注意事項の告知がなされた。

続いて読売新聞社より、基調講演者として吉池亮様をお招きし、約1時間にわたりご講演をいただいた。コミュニティを人間の身体とするなら健全な情報の流れは血流にあたるという喩えや、認知バイアスによって事実よりも不確かな信条が重視されてしまう現象など、メディアと情報がコミュニティに対して果たす役割について興味深いお話とともに、コミュニティとコミュニケーションの関係についても本会議を通じて有用である洞察を提供していただいた。

その後、国内外からの学生参加者が国と地域ごとにプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションの内容は事前課題として準備してきてもらっており、各国で話題になっているニュースとともに自己紹介をしていた。ブルガリア、ハンガリー、日本、キルギス、メキシコ、パキスタン、スロバキア、台湾、チュニジアの順に発表を行い、4人の教授参加者と運営メンバーも簡単に自己紹介を行った。

3-2 パート 0

[パートの目的]

以降のパートに向けた準備のための時間と位置付け、「リーダーズ」と名のつくフォーラムにおいてコミュニティをトピックにする意義をワークショップとディスカッションを通して見つめ直すこと。

[パートの概要]

パート0は開会式の後に読売新聞社本社ビル内において、4-6人から成る5つのグループに分かれる形式で1時間ほど行った。

まず各自が尊敬する人とその理由を挙げ、その人に影響を受けたコミュニティについてグループ全体で考えた。その後、TED TalkよりDerek Sivers氏の”How to start a movement”を視聴した。この3分のトークでは、広場でおかしなダンスを踊り出した人に対して後に続く人が次々と現れて広場全体が一体となって踊るようになるまでの過程をビデオで示し、それに対する考察が述べられている。視聴後はそれぞれがこのビデオから学んだ”リーダー”について全体で共有した。ここで、「コミュニティに必ずリーダーがいるとは限らないけれど、リーダーが何かを動かすためにはコミュニティすなわちついてくる人が必要である」ということや「名前がなくとも人が集まったらそれはコミュニティとなる」こと、「ムーブメントは最初に始める人だけでなくその価値を正しく評価して追随する人が必要である」ことなどを確認した。最後に自分が所属するコミュニティをリストアップし、これからコミュニティについて学ぶにあたって内省の時間とした。



[目的の達成度・反省]

初めて顔を合わせるにはお互いが積極的に発言していた。リーダーとコミュニティの関係性について参加者が共通認識を作るための時間としてのみならず、これから会議を行うにあたって議論の場を温める時間としても有意義に使えたと考えている。最初に尊敬する人について話したことは個人の価値観やバックグラウンドを知る上でもプラスに働いた。ビデオを見て学びを述べ合う部分では、抽象的なことに関して言葉で表現することに窮している場面も見受けられたが、それぞれが感想を述べ合うのではなくて誰かの意見に対して発言するような雰囲気が見られた。グループ分けの際に分かれ方を参加者に委ねたために時間をとってしまったが、以後はこちら側で出身国などを考慮してグループを指定することでスムーズに本題に入っていくことができた。

3-3 家族パート

[パートの目的]

家族というのは多くの人にとって最小単位のコミュニティになる。生まれたときからすぐ側にいて、価値観形成までも家族の影響を受けることは多々ある。しかし、規模の小ささゆえにどうしてもこのようなことに気付きにくく、コミュニティという枠に当てはめることが少ない。グローバル化が進む現代では、家族と一口に言っても一人ひとり捉え方が異なり家族内で起こりうる問題や家族を支える周りの環境に求められる対応も多様化してきている。このパートではディスカッションで参加者どうしの議論を行ったほか、フィールドワークに赴き実際の現場で家族に関する学びを深めることで、改めてコミュニティとしての家族が持てる機能について考えた。

[パートの概要]

このパートは3つのセッションから構成されている。セッション1では家族の中でも子どもに注目して、子育てや虐待問題について扱った。セッション2では近年多様化している家族形態に焦点を当て、同性婚や国際結婚、事実婚が法的・社会的に受け入れられにくい現状やそれを改善するためにどうすれば良いかを考えた。セッション3の前に3グループに分かれてフィールドワークに出かけた。セッション3では家族の内外に注目して、それらがコミュニティとしての家族の在り方にどのような影響を与えるのかを考えるものとした。

Session 1 子ども

[セッションの目的]

このセッションでは子どもに焦点を当て、子どもを持つ家庭に存在する問題である仕事と子育ての両立と虐待について取り扱った。この問題について各国により異なる実情をを共有し、認識するとともに、それを家族内でどのように支援できるか、解決できるかを考えることを目的とした。

[セッションの内容]

一つ目は子育てと仕事の両立についての問題を取り上げた。現在女性の社会進出は向上しており、共働きの世帯が増加している。始めに、子育てと仕事を両立することの難しさを認識してもらうために自分が子供を持つ共働きの女性であると仮定して一日をどう過ごすか、仕事の間子どもの世話はどうするか、子どもと一緒に時間はどう過ごすかについて一日のスケジュールを円グラフにして表現して考えた。その後、両立困難なことを自分の書いたグラフや実際の事例をもとに考えた。そしてその解決策をグループで考えポスターにまとめ、全体で共有した。両立困難なこととして、家事との時間

があまりなくコミュニケーションがとれずに衝突が多々発生する、学校にイベントに参加できないという意見がでた。解決策として、テレワークなど家で仕事をする、仕事場に近い場所に子どもを預けることのできる場所を設置する、家政婦を雇うなどのが挙げられた。

二つ目は、児童虐待の問題について取り上げた。虐待が発生する一つの要因として、虐待としつけの境界があいまいでしつけのつもりが虐待に発展してしまうということが考えられる。そこで虐待に属するのかしつけに属するのかがあいまいな事例を三つ用意してどちらに当たるか意見を出し合った。ここでは、事例の一つとして取り上げた子どもを家の外に出すという行為は安全性の問題から虐待に当たる、家の庭なら虐待には当たらない、そもそも家の外に出すという行為はしつけになっていない、子供に何も教育していないなどの意見が出た。その後、グループになってしつけと虐待の境界はどこなのか考えてもらった。ここでは参加者も一言では表すことはできない、年齢、国、文化によるなど状況によって変わるという意見が多数出た。

[目的の達成度・反省]

子育てと仕事の両立に関しては、メキシコでは男女の固定的な役割についての教育はされていないため夫婦の子育ては柔軟に行われている、ブルガリアでは現状保育園が足りていない、など国によって異なる実情をもとにしてこの問題について意見交換できたのは良かった。しかし家族内でできるサポートを考えて欲しかったのに対し、国からのサポートや保育園の設置など家族の領域を超えたサポート体制を考えているグループも多く、表面的な議論になってしまった。家政婦を雇うという意見一つにしても金銭的な問題によりその選択肢を選ぶかどうかは変わってくるので、こちらでより細かい設定を作って深い議論ができるように配慮すべきだった。

虐待問題に関しては、参加者から国の特徴、実情を踏まえて意見が活発に交わされたことは良かった。事例を基に虐待かどうか考えてもらう質問も、参加者がこの状況なら虐待、他の状況ならしつけに当たるなど意見交換の場で話が膨らんでいき、活発な議論になった。しかし、明らかに虐待にあたり議論の余地がない事例も出してしまったことは反省点である。議論は活発だったがあまり反対意見が出るのではなく意見の一致が多く見られたため、新たな視点を増やすためにも賛否が分かれるような質問を考えるべきだった。また、あいまいな境界を越えてしつけが虐待になることについての解決策も考えてもらうべきだった。

Session 2 多様化する家族形態

[セッションの目的]

□このセッションでは、多様な価値観を尊重すること、またそれを享受するための社会における問題点を見つけることを目的とした。グループでのディスカッションを主として、「家族」と呼ばれるコミュニティの多様性や可能性、向き合い方について考えた。

[セッションの内容]

まず、参加者それぞれが思い描く一般的な家族の形を共有した後で、地域や時代によっては偏見や差別を受けたり関知されなかったりしている家族形態（同性婚、国際結婚、事実婚）について話し合った。取り上げた家族形態の一つ一つについて、はじめに各国の状況を共有した。一つ目の同性婚では、同性愛者の権利と宗教や表現の自由の対立が生じたアメリカの例を扱い、社会が同性婚を受け入れるに当たって起こりうる問題を考えた。次に、国際結婚では複数の文化背景を持つミックスの人々を取り上げ、彼らを受け入れるコミュニティの問題点に目を向けた。最後の事実婚は、まず導入として、比較的最近に定着し始めた家族形態であり、なぜ注目を浴び始めているのかについて考えた。そして、その普及を阻む存在として婚外子の不平等な権利や差別、偏見といった問題を取り上げた。ここまでの、このセッションの前半である。

後半では、4つの大きな質問を参加者に提示し、それぞれに対する答えをグループで議論し、発表する形式をとった。一つ目の質問は、「どうしていくつかのコミュニティは結婚・家族形態の多様化、複雑化を受け入れているのか、そもそも多様なのは最近のことなのか」である。ここでは多くのグループが、家族形態が多様なのは今に限ったことではないという意見を出した。その多様性を認識するようになった要因として、文化・宗教の共生を促すグローバル化や情報技術の発展などがあげられた。二つ目と三つ目には、「多様な家族形態の理解や普及を阻むものは何なのか、また、根本的な認識を改めることは可能なのか」、「どうしたら様々な家族形態の共存できる社会を作ることができるか」を問うた。参加者たちは、伝統や宗教などを主な理解の障壁として考え、教育や法的整備、社会運動に改善点を見出した。最後の質問は、「多様な形態がある中で、家族と呼ばれるコミュニティの共通点はどこにあるか」である。多数が、血縁よりも、形成するメンバーが互いに対する愛や信頼感、尊敬の念を持っている点、価値観や経験、リスクを共有している点をあげていた。また、家族でも同居していないなど関係が保てないケースを取り上げて、必ずしも同居や愛が家族の規定要素ではないと言及するグループもあった。



[目的の達成度・反省]

参加者同士の情報共有を促す活動が多かったため、同じ話題でも異なる文化背景による受け取り方の違いや共通点を見つけるきっかけとなり、家族形態の多様性やその受容環境について考えてもらうという目的は達成されたと考えられる。ただ、大きな反省点として、話し合いにといった時間の短さが挙げられる。当初、ディスカッションには平均的に10分程度の所要時間で見積もっていた。しかし、実際にやってみたところ、その2倍は必要だったように感じられた。質問をなるべく減らし、本番中にも内容を少し削ってみたが、想定していたよりも、一つのディスカッションにかかる時間が全体的に足りなかった。その結果、それぞれの議論の内容が薄くなり、表面的に参加者出身国の状況を共有するだけの時間となっているグループが多く見られた。今後は、時間配分をよく考え、浅い議論や理解だけで終わらないようなセッションづくりを心がけたい。

フィールドワーク

3つのグループに分かれてフィールドワークを行った。訪問先ごとに報告する。

(1) チャイルドファーストジャパン (CFJ)

チャイルドファーストジャパンは、子どもの虐待・ネグレクトの防止と対応を普及・促進させ、子どもの人権擁護、健全育成に努めている特定NPO法人である。毎年「子ども虐待防止シンポジウム」を開催しているほか、2015年には「子どもの権利擁護センター」を設立し、虐待やネグレクトにより人権侵害を受けた子どもたちに専門的なケアを行っている。

[講演者紹介]

CFJ(チャイルドファーストジャパン) 理事長 山田不二子様



[目的]

家族パートのセッション1で子どもの虐待問題について扱ったため、虐待から子どもの権利を守り健全な育成を目指して活動している方からお話を伺うことで、虐待問題の現状や実際行われている対策についての理解を深めることを目的とした。

[内容]

講演は前日のセッション1で虐待問題を扱ったときに出た参加者の疑問点について答えていただく形で始まった。虐待としつけについての違いやレイプと性的虐待の違いについてなどの話から、日本での性教育不足についてまで議論が進展した。また質問が一通り終わったあとはチャイルドファーストジャパンの大きな事業の一つである「子どもの権利擁護センター」における児童虐待対応についてのお話を伺った。実際に施設の見学もさせていただいた。

[目的の達成度・反省]

虐待としつけについてはセッション1で時間をとって扱ったものの、実際に虐待防止活動を行っている方からのお話をいただきより理解が深まったように感じた。質問時間は限られていたが、どの参加者も熱心に質問するなどの積極性が見られた。また、子どもの権利擁護センターは日本以外にも多くの国で導入されていることを知り、その中には参加者の出身国もいくつかあった。しかしその存在を知っていた参加者はおらず、実際に施設見学をさせていただいたことで新たな興味を抱いてくれたと感じている。参加者からは、虐待に関する多面的な知識が得られたという感想が多く寄せられた。

(2) 社会福祉法人むそう チャイルドデイケアほわわ世田谷

医療的なケアを必要とする0歳から6歳までの子どもたちを預かり、ひとりひとりが社会に出て、楽しく成長発達していくことを目指しているセンター。ひとりのひとりの理解力や認知の仕方、身体の機能や医療的な配慮などを保育士、児童指導員、理学療法士、看護師が意見を出し合い、年齢や発達に合わせたオーダーメイドの支援プログラムを考え児童発達支援サービスを行っている。

[講演者紹介]

ほわわ世田谷 熊田明子様、山岸真優子様



[目的]

障がいを持つ子供たちとその家族を支える活動を行っているほわわ世田谷を見学することで家族を構成する要素の一つである子どもに対する家族以外からの支援の方法を理解する。



[内容]

最初に、家族を支援する手段の中でのほわわの位置や毎日の活動内容、施設で働く人たちについてスライドを用いて紹介をうけた。家族の負担が大きくなりがちなポイントとほわわが子どもの発達を支援するためにできること、児童によって必要なケアが違うことから個別プログラムを組んでいることなどを学んだ。その後、実際に施設に來ている子供たちの様子を屋内と屋外で見学しながら質疑応答の時間を設けた。医療的ケアが必要な子を特別視せずに普通の子と同じような環境で成長できる環境づくりを目指していることも学んだ。

[目的の達成度・反省]

障がいを持つ子供の育児は健常の子どもの育児より注意することが多く家族の負担は大きくなる。そのような子どもに対して家族ではない人ができる支援方法の一例を学ぶことができたと思った。実際に活動している方の考えを聞くことで支援者がどのような役割を担っているのか理解する一助になったと思う。参加者も見学している中で意欲的に質問をしていた。福祉について専門的に学んでいる参加者はいなかったが、表面的な支援方法だけでなく支援する中で重要となる理念的な話まで触れることができた感想が寄せられた。

(3) 電通ダイバーシティ・ラボ

電通ダイバーシティ・ラボはダイバーシティ&インクルージョン課題のソリューション開発を専門として行っている。障害・ジェンダー・多文化共生・ジェネレーションという領域において現在の日本が直面している問題を調査し、そのソリューションを提供している。

[講演者紹介]

電通ダイバーシティ・ラボ 伊藤義博様、吉岡妙子様



[目的]

家族パートのセッション2で家族形態の多様化を主題として同性婚などを取り上げたため、そのことについて研究をしている企業を訪ね話を聞き知識をより深めることを目的とした。

[内容]

電通ダイバーシティ・ラボが実施したLGBT2018の調査報告をしてもらうと共にその内容について議論を行った。現在はLGBTには限らずQuestioning、Xジェンダーなども存在することや、若者のほうがLGBTに属する人やそれについての知識がある人が多いというデータを紹介していた。日本よりも他の国の人のほうがLGBTに属していることを隠したいという雰囲気は薄く、また相手を尊重しそのような多様性を受けれるオープンマインドが大切であるという意見が多く得られた。

[目的の達成度・反省]

LGBTについて専門的に調査している方に話を聞くことでの学生の力だけではできないプログラムを作ることができた。詳細な情報を得ることで、それを基に電通の方に質問をし、議論を深めることができたため貴重な機会となった。参加者からも積極的に日本の現状に耳を傾けるとともに自分の国と比較して意見を交換し、充実した時間となったという感想が得られた。



Session 3 家族の再認識

[セッションの目的]

このセッションでは家族がどのように支えられているのか図を用いて質問を重ねることで理解を促し、普段意識して生活することがないコミュニティとしての家族について再認識する。

[セッションの内容]

セッションは基本的に自らの経験を基にグループ内で話し合う形をとった。多くの人が日常生活で無意識に受けている支えを意識しやすいように具体的に想像しやすい例を示して理解を促した。最初に私たちが日常生活で行っている行為にどのようなものがあるのか考えてもらった。具体的には食事や会話などが日常生活で行う行為としてあげられた。具体例としてでてきた行為がどのように支えられているのか考えてもらった。このセッションでは自らの生活の満足度を評価することで支えを意識化しようという狙いがあった。自分で評価する際に家族というデリケートな面も持つものに対して他者と安易に比較できないよう精神的な指標を用いて評価してもらった。その際に用いたのが住環境の要素である快適性と安全性である。日常生活で快適性と安全性を感じるような具体例をこちらでもあげ、参加者にも他に具体例を思いついたものがないか考えてもらった。家族が快適性と安全性の観点からどのような場面で支えられているのかグループ内で共有した後、それぞれの生活の満足度を評価した。次に図を用いて家族が社会と家族の構成員の二つの方向から支えられていることを理解したうえで、社会とは何か、どのように社会と構成員は家族を支えているのかを模造紙に図示してもらった。ここで参加者から家族を支える方法の具体例としてフィールドワーク先であったほわわなどの意見が出た。最後に家族パートのまとめの意味を込めてどのように家族の認識が変わったのかをグループ内で話し合ってもらった。

[目的の達成度・反省]

家族というコミュニティについて考える機会となるセッションづくりはできたと思い、多くの参加者が家族というコミュニティについて考え直す機会となったとアンケートに回答していた。しかし、午前中のフィールドワークから帰ってくる時間が参加者によってばらつきがあり、予定時刻から始められなかったためいくつかの質問を削ったり、合同させたりしたためセッション内の流れが参加者にどこまで伝わったのか不明だった。本来、流れを理解してつながりを意識しながら質問に対して答えを考えてほしかったが、一つ一つの質問を別のものとしてとらえて考えている参加者が多かったため、表面的な話し合いになってしまった部分があった。質問の意図がうまく伝わらず、個人単位で考えてほしい問題を国の影響として考えていたり、スライドに明確に書き記す必要があった。時間的余裕のなさから共有する時間をとらなかったが、終了後のアンケートで共有する時間が欲しかったと回答をもらった。フィールドワークのすぐあとのセッションだったからか日本の制度に基づいた家族の支援方法とは何かという考え方に偏ってしまっていたため各国特有の制度について違いを意見交換する時間を作っていたら国際フォーラムならではの知識を全体で共有して増やすことができたのかもしれない。



3-4 社会パート

[パートの目的]

このパートでは、家族と国家という規模として両極端のコミュニティ以外の集団を取り上げ、それぞれのコミュニティの問題を含めた話題提供を図った。同時に、人の価値観と行動規範が所属しているコミュニティからどのように影響を受けるか、コミュニティをどのように運営すべきか、異なるコミュニティが共生する際に付随する問題や考えるべきことなどといった、コミュニティについて考える際に重要だと思われる視点を涵養する場を提供することを目指した。

[パートの概要]

取り上げるコミュニティを学校、企業、そして外国人移住者と元々の居住者からなる集団という三つに定め、それぞれについてセッションを用意した。

学校に関しては、コミュニティに溶け込めない子供が存在するという問題と、学校が人の価値観に与える影響をディスカッション形式を中心に考えてもらった。企業に関しては講演者を招き、コミュニティの運営について考えてもらった。最後のコミュニティの共生については具体的に日本の芝園団地を紹介し、コミュニティの共生、異なるコミュニティを理解するのに必要な要素について考察してもらった。

Session 1 学校

[セッションの目的]

学校パートでは学校コミュニティの特徴を考え、学校コミュニティに所属する人の居心地について考えた。またコミュニティに所属する人がコミュニティからどのような影響を受けるのか学校教育を通して考察した。

[セッションの目的]

セッション前半では、自身がどのようなコミュニティに所属し、それぞれのコミュニティが自身の中でどのような位置づけであるのかを円を用いて図示することでまず個人の所属について再認識し、他のコミュニティと学校を比較してその違いを考えた。学校コミュニティにうまく馴染めなかった人々の話題をグループ毎に共有し、その原因を考えてもらった。学校に馴染めない人がいる現状に対する新たな教育の形として代替教育を紹介し、どのような教育システムが望ましいか考えてもらった。

セッション後半では日本の教育方法や部活動を例に挙げ、自身が体験した教育や所属する国や地域の教育について考え、教育によって人々がどのような影響を受けているのかを考察した。

最後に学校の役割と理想形について参加者の考えを文章にして提出してもらった。

[目的の達成度・反省]

セッション全体を通して、参加者全員が学校に所属した経験があり、自身の身近なトピックとして話しやすかったためか、議論が途切れるような場面は見られなかった。「学校」という言葉が指す内容にあえて触れずにセッションを進めたが、参加者には高校なのか大学なのかそれ以外なのかという疑問があったことが事後アンケートから分かった。場面設定を明確にした方が何を話すべきか参加者にはわかりやすかったと思われる。

議論全体を通して、コミュニティの話ではなく教育論に寄ってしまっているという指摘も受けたが、これに関してはセッションを作っている時から自身も感じていた事である。ただし学校というコミュニティを議論する際、教育について言及しないのは無理があると思われる。学校コミュニティについて教育というトピックを用いて議論をしている構造と見ることができる。コミュニティの議論として認識してもらえなかったのはセッションの作り方に問題があると思われるので、来年度以降の反省としたい。

提出してもらった文章を読むと大方の参加者が教育について言及して学校の役割、理想についてまとめていた。セッション中に日本の学校の教育について少し触れた影響でか、日本の教育形態の問題を指摘する文章も散見された。設定文字数の少なさからか表面的な話にとどまる場合が多かった。コミュニティでの居心地、コミュニティからの影響という二つの軸を事前に説明したものの明確にそれらに言及している人は少なかった。また、学校コミュニティについて議論する上で、教師やPTAといった児童、生徒以外の人間や団体と学校コミュニティとの関係や双方向の影響について言及した方が、より多面的かつ包括的な議論になったかもしれない。

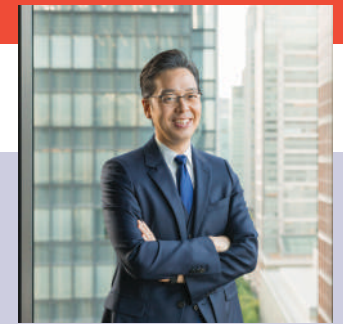
参加者の多くがセッションを通してコミュニティでの居心地、コミュニティから受ける影響について考察してくれたのは間違いないと思われる。ただし議論の終着点としてそれらが反映されづかったのは課題設定の反省である。

Session 2 企業

[ご講演者・ファシリテーター紹介]

長川知太郎様

デロイトトーマツコンサルティング・パートナー



東京大学法学部卒業後、トーマツコンサルティングに入社、現在に至る。医薬品・医療機器業界における国内外の主要企業に対し、企業戦略、統合戦略、海外展開戦略の策定・実行支援など、クロスボーダープロジェクトを数多く手掛けている。

[セッションの目的]

社会を動かしている企業というコミュニティについて、①企業を一つのコミュニティと捉えてその内部の動かし方を考える、②企業を社会の中の一員という捉え方をしどのように関わっていくべきかを考えるという二つを学ぶこと。

[セッションの内容]

企業セッションではデロイトトーマツコンサルティングから長川様をゲストスピーカとしてご講演をいただいた。1時間ほどの基調講演では企業を一つのコミュニティとしてみる視点と、企業が社会の一員である視点の両面からお話をしていただいた。チームの新しい形としてArmy型と対局にあるTeal型について学び、これからのリーダーの考え方、企業のあり方についてお話があった。Tealではチームを作る人全員がフラットな関係性にあり、一方的な指示で動くのではなく構成員一人一人の能動的な行動と双方向コミュニケーションが期待される。長川様はTealを例えとして「芽」に言及し、指示を出すリーダーがいなくても一つ一つの細胞が役割をわかっている方向に成長していく様がTealだと説明してくださった。人の組織でもこのような仕組みが実現すれば革新的なアイデアの土壌になりやすく、尊敬と信頼の上に成り立つ意思決定が行われ、グローバル化や多様性にも対応しやすいという強みを持つようになる。Tealが実現するのは構成員が価値観を共有できた時であるので、意思決定を下すトップがいなくなると動きが遅くなりそうなものだが長川様によるとそうはならないという。

ディスカッションではTealの問題点は何かを40分ほど話し合った。あるグループでは主に組織構成について話し合った。国連という組織を例にとり、どうして世界平和という目的を共通で持って国同士が対等に話し合える場があってもうまく行かないのかを考えた。その中で階層型のTealという一つの解決策が出た。少人数で話し合い、それらのグループから代表が一つ上の階層の会議に出し、最終的に一つの結論にたどり着くというものである。それによって合意のしやすさに加えて全員が意思決定に関わることができる考えた。

全体で意見をシェアする時間には長川様のファシリテーションのもと活発な議論が行われた。特に盛り上がったのは、組織内の情報共有に関してであった。一方では組織構成員が基本的な情報を全て共有しておかなければTealは実現できないのではないかとする一方で、他方は多くの専門家を抱える形の方が理想的だとした。どちらも組織の効率と成果を考えている点では一致しており、全体として答えは出ていないがこの議論は重要な示唆である。また、組織を作るにあたって構成員が所属意識を持たせ、民主主義的な意思決定プロセスが重要であるという意見も複数グループから出された。

[目的の達成度・反省]

Tealという言葉自体聞くのが初めての中で、それぞれがリーダーとして組織を作る際の理想像を考えることができる貴重な機会になった。このフォーラム全体を通して一つの議題に対してグループディスカッションにける時間は10~20分ほどだが、今回は時間延長の要望もあり、結果40分ほど話し合っていた。もう一つ用意していただいていた議題を扱うことができず、目的②について話し合う時間は取れなかったが、その分目的①に関して集中して取り組むことができた。

Session 3 Diversity

[セッションの目的]

前セッションで「企業」を扱ったが、本セッションでは、多様なバックグラウンドを持つ人々が国境を超えて企業で働くことから生まれる現象や問題に注目した。そこから、様々な価値観を持つ人々が居住地という逃れられない地域社会コミュニティの中で生活することで引き起こされる摩擦や影響について理解を深め、グローバル化の進む現代社会における人間同士の共存のあり方を模索することを目的とした。

[セッションの内容]

本セッションは大きく分けて3つのパートで構成されており、一つめに「外国人労働者問題」、二つめに「芝園団地の例から見る多国籍共存」、三つめに本セッションの統括でもある「多様な人々が共存する方法」を扱った。

一つ目のパートは、2019年に日本の入国管理法が改正されたことから日本の現状を導入として参加者に提示した上で、参加者は3人1グループとなりディスカッションを行った。各々、自分たちの出身国の事情を他の参加者に共有しつつ、外国人労働者が及ぼす影響を産業・地域の両面から考えた。

二つ目のパートは、前パートで扱った外国人労働者が地域住民にどのような影響を及ぼすのかについて、6人1グループとなりさらに深く考察を重ねた。ここでは埼玉県にある「芝園団地」を具体例として挙げ、そこで暮らす人々の生の声をとらえた動画を放映してより実態に即した議論ができるよう図った。ここでは現地で実際に行われている試みを紹介するとともに、現在の活動の持つ問題点を考えつつ新たな施策を模索した。

三つ目のパートは、今までの二つのパートを総合し、どのようにすれば様々なバックグラウンドを持つ人々と既存のコミュニティとの間で起こる摩擦を克服できるのかについて話し合った。セッションの最後にはグループごとに全体へ意見を発表する時間も設けた。

[目的の達成度・反省]

全体を通して、「文化や習慣の違う人々との付き合い方を模索する」という本セッションの大きな目的は達成できた。ただ、フォーラムの半分以上を過ぎた頃であったことに加え、午前中の議論が非常に白熱していたこともあり、参加者全体に疲れが見えていた。これを見越して休憩をこまめに挟んではいたが、やはり後半に進むに従って議論のペースが落ちていたことは否めない。

最初のパートでは少人数グループで行ったため、各国の事情も含め、時間にゆとりを持ってある程度の深さまで議論ができた。後半には予定時間よりも早く議論が完結する兆候が見えたため、急遽次のパートで組む予定だった6人グループで意見の共有をさせたが、異なる考えに触れる機会も作ることができ、より充実させられたと認識している。

二つめのパートでは、「参加者一人ひとりが団地のリーダーだったなら」という仮定を使って議論を進め、次世代のリーダーとしての思考訓練の側面を持ったものとなった。日中の文化について詳しくない第三国出身の参加者も日本人参加者も新たな視野を得ることができ、複数国が集まるフォーラムならではの経験ができた。しかし一方で、芝園団地について議論する際、いくらビデオがあったとはいえ、日本人が一人もいないグループでは日本人なら当たり前に関共有されている感覚が理解されておらず、議論の深まりに差が出てしまった。

最後のパートでは、席替えを行って今までとは別のメンバーと議論を行った。グループ内で固定化された視座からの意見に偏ることの無い多角的な議論を狙ったものであるが、最後の全体共有では“tolerance”や“communication”などといったワードがほぼ全グループから出ており、その狙いは達成されたように思う。ただし、当初こちらが企図していた「文化や慣習の違いの根源は出身国のみならず個人(家庭)にもある」という個人スケールでの議論が乏しかったことは、セッション作りの観点からも反省すべき点である。

しかし、様々な国家間の事情を共有しつつ共に考えを深めていく、という議論のあり方は概ね達成できており、参加者からも満足できたという声が届いたのはこのフォーラムの特性を十分活用できた証であろう。

3-5 国パート

[パートの目的]

このパートではコミュニティとして最大規模の国を取り扱う。近年様々な国際問題が発生しており問題の早急な解決が必要である。しかしながら、それぞれの国が問題解決に全面的な協力をする事は難しい。この現状を、国家間の関係と国の内側の両方の視点から分析し、考察する。また、この問題を解決しうる国家間の関係、または新たな国の形を検討することを目的とする。

[パートの概要]

このパートは三つのセッションに分けて行った。一つ目は連続ではなく、1日目と2日目に分けて行うが、国パートの導入部分、少数民族という国の内部に存在する複数の民族コミュニティについての問題を扱う。セッション2では、どのような国際問題があるのか、またどうして国際問題の解決が難しいのかを、文字上ではなく自身で体感することを主な狙いとした。セッション3では、国がどのような特徴を持つかを理解し、国際問題を解決しうる国の形を考察した。また各セッションをさらにいくつかのトピックに分けて行った。

Session 1 Within Nations

Topic 1 History of Nations

[トピックの目的]

「国史」の存在がコミュニティとしての国にどのような影響を与えているかを明らかにする。「国史」それ自体がどれほど主観性を帯びているものを再確認することで、国をコミュニティとして結束させる一つの装置としての「歴史」を理解する。さらには、国を超えた衝突を引き起こすこともある歴史問題やそれに連なる問題の源泉が、そもそもの視点の違いにあることを理解し、国というコミュニティを超えた相互理解の必要性を考える。

[トピックの内容]

参加者には、事前に英文各500語程度で①自国の歴史、②他国（こちらでランダムに指定した）の歴史をまとめる課題を課していた。自国の歴史は、それぞれ家庭や学校の教育などにより学んでいるはずだが、ランダムに指定される他国の歴史については適宜調べて書くように求めた。そうすることで、自国の歴史は主観的な歴史叙述に、他国の歴史は客観性の高い歴史記述になることを想定した。当日は、そのうちからメキシコからの参加者、日本の参加者が書いた日本の歴史と、パキスタンからの参加者、ブルガリアからの参加者が書いたブルガリアの歴史を用い、それらを比較検討する試み

を行った。具体的には、外からの目線で書かれた歴史記述を丸読みなし司会による音読をし、内からの目線で書かれた歴史叙述は執筆者本人が朗読した。その語り口などからも差異が出るのではないかと考えたためであった。その後、それぞれの「歴史」の違いと、二つに通底する違いが発生した原因の考察をグループで行い、ポスターを用いて発表した。

[目的の達成度・反省]

比較対象をこちらで事前に選定したこともあり、概ね考えていた通りの考察結果となった。歴史が視点によって異なること、その視点の違いが国の内外だと顕著であること、そしてその違いは半意図的に再生産されていることなどである。反省としては、この点が国たるコミュニティにどのように作用していたかについての考察まで及ばなかったことである。セッション構成が前後してしまい、この内容をさらに深く考察するTopic6とTopic7が後日になってしまったことが残念である。もっとも、翌日のTopic6で「歴史」を挙げていた人が少なからずいた点では成功だったかもしれないが、もう少し議論をこの時点で深めておくべきであった。とはいえ、国パートのアイスブレイクの立ち位置であったこのセッション（Topic）は、程よい導入になったのではないだろうか。

Topic 5 Multi-Ethnicity of Nations

[トピックの目的]

ここでは、国というコミュニティの内部に存在する複数の民族コミュニティについて考えた。参加者の出身地によって現状や意見に大きな差が見られるテーマであることが予想されたため、各国での現状の共有に一定の重心を置いたうえで、民族コミュニティを包含する国の理想的なあり方について議論した。

[トピックの内容]

まず、国内に自分と異なる民族コミュニティの存在を感じるかという質問を全体に投げかけ、グループ内で各国の民族コミュニティの現状について経験や知識を共有した。その際、経験に基づいた描写を促すための指針として、1. どのような点で異なるのか、2. 違いによって何が起きているのか、3. 政府が特定の民族コミュニティに特別な対応を取っているか、という3つの観点を提示した。その後、複数の民族コミュニティはどのようにすれば調和的に共存できるかという設問について各グループで話し合い、代表者が議論を共有した。法や政府による支援を通じて協調を目指す案とともに、コミュニケーションを通じた互いの尊重や多様性の受容、忍耐の精神や、それらを養う教育を重要視する意見が多く見られた。

[目的の達成度・反省]

各国の状況の説明は、どのグループも新たな知識を提供し合っており充実していた。しかし、その後のディスカッションのテーマが大規模かつ抽象的であったため、議論で導き出されたアイディアも概念的なものが多く見られた。前半で共有された現状に軸足を残してほしいこちらの意図が適切に伝わっていなかったことが原因だと推測される。誘導の明示と設問の抽象度の検討の必要は、以降プログラムを設計する際の教訓としたい。

Session 2 Beyond Nations

Topic 2 Role-Playing Game

[トピックの目的]

国を超えた問題、グローバルな問題に取り組むことの難しさを理解する。グローバルな問題の先駆けでもあり代表例である、地球温暖化問題を例に取り上げ、その解決策として地球環境税の導入という解決策を議題に据え、条件も価値観も国益も異なる国が一つの合意に達することが困難であることを確認し、その困難さの原因を考察してもらう。すなわちそれは、国境を超えた他者への関心の低さにあるのではないかと考える。

[トピックの内容]

参加者を6か国の大使に割り当て、気候変動枠組条約締約国会議を模した「東京会議」を開催した。国はこちらが用意した仮想国家であり、それぞれに立地、国土面積、気候、資源、人口、経済発展状況、政体、気候変動の恩恵や被害、の8つの基本的情報を与えた。とはいえ、それぞれの国家にはモデル国家があるため、それらを意識してプレイすることも可能である。そのうえで、「商取引に対し一律1%の地球環境税を設定し、その歳入を世界中の気候変動の対策費用に拠出する」という議題のもとで各国が立場を検討し、スピーチ、議論を行い、最終的に全会一致の採決に望むといった、一種の模擬国連を行った。

その後、全会一致にならなかったため、可決できなかった理由を議論してもらった。

[目的の達成度・反省]

参加者が「ロールプレイ」をしてくれればしてくれるほど可決できないシナリオだったので、可決に至らなかった時点で半ば目的は達成であった。そのうえで、その理由をグループ内で上手く議論することができていたのではないかと推察される。

一方で、反省点は多い。まず、模擬国連を短時間で行うことの難しさである。1時間という時間の制約から、当初は着席討論のみとしていたが、参加者から要望があったため、非着席討論も時間を延ばして行った。結果的に参加者の多くは満足の行くアクティビティになったと述べてくれたが、更に議論を深め、妥協と合意に近づくプロセスをやりたかったという声も散見された。一方で模擬国連が目的ではないので、難しい問題である。また、最後の考察がやはり至らなかったかもしれない。国籍の異なる参加者が同じ仮想国家の大使となり、別の仮想国家と議論するという「面白い」アクティビティではあったが、主たる目的が最後の考察にあったことを踏まえると、議論、共有、再議論までたどり着きたかったところである。

Topic 3 Borders and Nations

[トピックの目的]

直観による判断に、親密さが大きく影響していることを確認する。複数の思考実験を通じて、自国の被災者に対する支援と、他国の被災者に対する支援では対応の差がでることが予想される。その対応の判断の差はどこからくるのか、そこに国を超えた遠い被災者への支援の難しさがあるのではないかということを考える。

[トピックの内容]

こちらで作成した思考実験を行った。3つの類似した設問から成り、すべて自分の稼いだ資源をどのような目的に分配するかというものを問うものである。アルバイトで稼いだ数万円を、①家族や友達へ贈り物、または、自分の旅行、②シリアの数千人の難民の子供たちへ寄付、または、自分の旅行、③自国の数十人の災害被災者へ寄付、または、自分の旅行、のそれぞれの設問についてどう分配するか、①から順に設問の回答を考えた。最終的に、分配の変化を踏まえて、その変化が生まれた理由について検討した。重要なのは②と③が他国と自国であることだが、導入として①を設け、また人数も一つの指標になると考えて変化させた。もちろん、利己主義者や利他主義者、功利主義者など様々な可能性がある中で、グループで変化を共有させてから原因の議論を始めてもらった。最もありうる回答は、②より③の方が、寄付額が増えることである。

[目的の達成度・反省]

最後に全体共有を入れなかったため、どのような議論があったかを詳しく追うことができていない。ただ、最後に行った趣旨説明での参加者の反応を見るに、概ねこちらの狙い通りに行ったのではないかと考えられる。しかしながら、数人の参加者は違った意見を持っているようで、その意見を押さえ込み、こちらが求めていた結論に丸め込んでしまった点は否めない。全体共有をしてさらに考察することで、より深い理解を得られたのかもしれない。

Topic 4 Refugees Problem

[ご講演者・ファシリテーター紹介]

片岡昌子様

日本赤十字社国際部国際救援課救援係長
福岡県出身。

2007年、日本赤十字社入社。本社国際部にて離散家族支援等を担当後、同社千葉県支部で広報や青少年赤十字事業に携わる。2014年から3年間、赤十字国際委員会（ICRC）へ出向し、ミャンマーやガザといった人道支援の現場を経験。2017年8月以降の同社のバングラデシュ南部避難民支援では現地にて連絡調整員（2017年9月～10月、2018年1月～2月）やプロジェクトマネジャー（2018年4月～6月）として支援の調整と実施に当たった2018年9月末のインドネシア中部スラウェシ島地震救援では現地にて連絡調整員を務める（2018年9月～10月）。



[トピックの目的]

コミュニティはある程度固定化された構成員から成り立ち、境界線を持つ。この特色は国にも当てはまるが、難民問題は構成員が意思に反してコミュニティからの脱出を強いられる特殊な事例としてとらえることができる。このトピックでは、難民問題に関する講演と議論を通して、国が抱える問題を考察する。

[トピックの内容]

日本赤十字社より片岡昌子様をお招きし、コミュニティの観点から難民問題を考えるこのセッションの進行をしていただいた。初めに、難民が直面している問題や赤十字社による支援の実情を映像をまじえて解説いただいた。続いて、郷里を追われることになった一つの家族に見立てたグループに分かれてロールプレイを行った。食料品、スマートフォン、充電用コード、現金、貴金属、テント、寝袋など避難生活に必要な様々な品物が描かれたカードからグループごとに5つを携行品として選択し



た後、避難を続けるにつれて消耗品を使い切ったり援助の見返りとして貴重品を手放さざるを得なくなったりと、難民の置かれる状況を疑似体験した。最後には、難民問題を1. 移動を強いられる人々のコミュニティ、2. 彼らが後にするコミュニティ、3. 彼らを受け入れるコミュニティの3つの観点から整理し、それぞれのコミュニティへの影響を各グループで分析し、議論を全体で共有した。

[目的の達成度・反省]

日頃身近に感じる機会が僅少である難民問題について、多様な媒体を通して実感を伴う理解が達成できた。特に、難民となった家族になりきるアクティビティは、知識として持っていた以上の発見が得られたと参加者からも大きな反響があった。グループディスカッションのテーマもコミュニティに即したものであり、難民問題を題材に「国」の文脈にとらわれずコミュニティの議論が活発に行われた。

Session 3 Nation as a Community

Topic 6 Belonging to a Nation

[トピックの目的]

普段の生活の中で国を一つのコミュニティとして見ることは少ない。しかし、国も確固とした一つのコミュニティであり、様々な要素で構成されており、無意識下でそれを感じている。ここでは自らの経験を元にそれらを意識下に置き、国とはどのようなものであるかを考察する。

[トピックの内容]

自身がどのような時に国の一員であると自覚するかを考察することで国を国たらしめる要素をあげる。まず、個人で考えたものを付箋紙に書き、それをグループ内で共有、模造紙に付箋紙を分類して貼った。その後、別のグループの模造紙を見て回る時間を設け、最後にもう一度グループ内で考える時間を設けた。

[目的の達成度・反省]

自身の経験に基づくテーマであり、参加者が様々な意見を出すことができている、セッション3のつかみとして機能していたと思われる。しかしながら、この本会議中初めて付箋紙を使うということもあり、模造紙と付箋紙の大きさを見誤ってしまい、模造紙が小さすぎて書きたいことが書ききれないということが起きてしまった。また、どのように要素をあげ、どのように分類してポスターに貼るべきかという面で混乱が生じており、それに時間を消費してしまっていたので、あらかじめ指定すべきであった。

Topic 7 Characteristics of Nations



[トピックの目的]

国を扱う本パートの総括として、他の形態との比較検討により国の概要を把握することを主眼に置きつつ、本会議を通底するテーマであるコミュニティの特色を見出すことも目的の一とした。

[トピックの内容]

フォーラムを通じて議論してきた他のコミュニティとの比較を通じて国というコミュニティの特色を検討した。比較対象は1. 家族、2. 学校、3. 国際連合とし、それぞれと国との共通点と相違点を付箋紙を用いて模造紙上に整理した。その後、会議室を歩きながら別のグループのポスターを見て回る時間を設け、最後にグループ内で国というコミュニティの特徴を導き出す議論を行った。

[目的の達成度・反省]

これの一つ前であるTopic6はこの議論の土台となるトピックであったが、Topic6で出した国の要素をこの議論に利用している班が少ないように見受けられたので、参考にするよう指示を出すべきであった。他の形態のコミュニティとの対照は、国の特徴に限って相対化・一般化する役割よりも、コミュニティについて検討してきた本会議全体の総括として機能を果たしたようだった。概念的に各コミュニティを捉える試みであったため議論全体に漂う浮遊感是否めなかったが、付箋紙と模造紙という現物的ツールの活用によって集中力が繋ぎ止められていた。

Topic 8 Nation in the Future

[トピックの目的]

世界には様々な国家間の協力関係が存在しているが、今まで国際問題を完全に解決している国家間の関係はあまり見受けられない。今まで国家間の関係、国それ自体について考察してきた。このトピックでは国パートの総括として、今まで行ってきた国家間の関係、国それ自体についての現状分析を考慮し、国際問題を解決し得る新しいコミュニティの形を考える。

[トピックの内容]

円を国に見立て、複数の円を線で繋ぐことや、部分的に重ねて紙に書くことで、国家間の関係を表す。この作業を通して新たなコミュニティの形を考える。まず個人で考えたのち、グループ内で共有し、最後にグループ内で出た興味深い例を全体の前で発表する時間を設けた。

[目的の達成度・反省]

大きな問題に対する解決策を考えるということで、抽象化して話しやすいようにするために円を使う方法を採用したが、それがかえって参加者を困らせてしまっているようであった。円の書き方の説明に注力してしまい、意図の説明、注目して欲しい点の説明が足りなかったことが原因であると思われる。また、地に足つかない議論をするぐらいならば、現状分析をまとめにすることも考えるべきであった。

3-6 パート結び

[パートの目的]

3つのパートを通して、様々な種類のコミュニティの出現に付随する問題、または異なるコミュニティ間の摩擦という話題が登場した。多様性という言葉に代表されるように、現代社会では特に個人の自由を尊重することが健全なコミュニティの持続的な成長のためには必要であるという考え方を正しいとする風潮がある。しかし本当にそれが正しいのか、多様性とはそもそもなんであるのかを考えることで、浅い思考で「多様性」という言葉を使っていることを自覚し、自らを見つめ直すこと目的とした。

[パートの内容]

はじめに今までの会議を振り返って学んだことを述べあった。

その後はこちらがトイを投げかけてグループディスカッションをせずに議論に参加したい人が参加するという形式で進めた。

質問はYES/NOで答えられるものとそうでないものの二種類を用意し、前者では肯定側と否定側に分かれてマイクを回して議論をし、後者ではフィッシュボウルという用意された椅子に意見を述べたい人が座って議論をする形をとった。

最終セッションで参加者に投げかけた問いとその意図は以下である。

- ①多様性は全ての場面において認められるべきか否か：いろいろな場面で「多様性」が求められている社会でそれぞれがその風潮に対してどのような態度であるかを表明すること
- ②日本において一部の医科大が男子生徒を優遇していたことについて：私立の学校において明確な理由がある場合にクォータ制を敷くことの是非を考えてもらい、対象を絞ることの利点やその是非、差別との違いなどについての議論を深めること。
- ③寛容は不寛容に対して不寛容であるべきだろうか否か。：逆説的な聞き方をして「多様性を受容する」とはどういうことなのかを考えること。
- ④「無関心」は多様性を実現するひとつの解決策になりうるか否か。：どうしたら社会において多様性を実現できるのか、どのような態度が必要なのかを考察すること。

[目的の達成度・反省]

①の問いにおいてはおおよそ半分に分かれたが、過半数が肯定側にいた。これは多様性が美化されている社会において一般的に受け入れられている考え方として学生も同意をする人が多いのではないかという見立て通りの動きであった。

②に関しては受験生に隠して一部の受験生にのみ加点していたということは問題とされるべきだが、一私立学校が自校にほしい学生を性に基づいて決める権利について議論してもらおう予定だったが、議論の途中からジェンダーロールの話になってしまった。そこで、再度論点を修正しようとしたが、最終的には正に基づくクォータ制を許す社会であってはならないという主張が重ねられた

③ほとんどが肯定側に回った。興味深いのは①で肯定側にいた人が多くが不寛容を許さないという寛容さが欠如した点において自己矛盾に陥った点である。「多様性」という言葉の曖昧さから生じるゆらぎが意図していたように参加者の中で起こったものと考えている。

④ちょうど半分ずつぐらいで分かれた。肯定側は必要以上の当事者意識が相手への過干渉につながることもあるので無関心であることである種の平穩になるとの主張を展開し、否定側は無関心こそが排除の原因になると主張していた。最終的には無関心とは何かという議論に発展し、意識的な無関心と無意識的な無関心の話題に及んだ。コミュニティを発展させる多様性とは何か、その理想とする形に統一解はないということがわかり、多様性を認めることの難しさのひとつが示されたと考えられる。



3-7 文化交流会

[目的]

参加した国や地域の文化交流。異文化理解を超えた関係性の構築があることを望みたい。

[内容]

参加者には、自らの国や地域の服装、装飾品などを身に着けることを奨励した。そのうえで、まず初めに、各参加国や地域の参加者が、それぞれの国や地域の文化について10分程度のプレゼンを行った。食べ物の紹介から素敵な景色まで、そのアピールポイントは様々であった。その後、国や地域別のブースに参加者が持ち寄った食べ物やお菓子、飲み物、その他小物や楽器などを囲んだ文化交流が行われた。互いに持ってきたものを説明しあい、装飾品を交換し合って写真を取り合うなど、参加者同士での交流が盛んにみられた。



[目的の達成度・反省]

プレゼンでは、各参加者の国や地域の文化を理解することができた。開会式でも少なからず紹介は行っていたが、この文化交流会でさらなる理解を深めることができたのではないかなと思う。参加国・地域の多様さがGNLFの特色であるため、この点は非常に良かった点であった。

さらに、その後の文化交流では、これまで見聞きしたことのないようなものに出会うことができた。それら文物について参加者で互いに説明しあうことにより、その国や地域の文化に対する更なる関心を高めることができたのではないかと考える。贈り物をしあったり写真を一緒に撮ったりするなかで、GNLFというコミュニティのなかでの関係の深化も図ることができた。



3-8 閉会式

[閉会式次第]

- 会頭挨拶
- スポンサー紹介
- 本会議総括
- 参加者によるスピーチ
- 参加賞授与

冒頭の会頭挨拶で松本泰平から最初に発せられたのは、新型コロナウイルスが世界的な不安材料となる中で、無事フォーラムを終えられたことへの感謝の言葉だった。フォーラム開始の2日前に政府からイベント主催者に再検討の要請があり、また、フォーラム期間中も刻一刻と変化する世の中の動向を見ながら非常に難しい判断を迫られたため、無事完遂したことへの安堵の言葉が思わず漏れた。期間中は参加者全員に毎日の検温と手洗い、消毒への協力をお願いしており、その甲斐あってか何事もなく終了することができた。

プログラム担当の陳は、本会議総括において今年度のフォーラムで扱った内容を振り返り、多くの参加者が口にしたキーワードは他者への理解と寛容さであったと総括した。その上で、現実を取り巻くのはラベリングであったり排斥であったりであるから、理想との乖離がある中でどのように行動していくのかということをこれからも考え続けてほしいとの言葉があった。そのひとつの答えは最終セッションで扱ったがそれだけではないのと言うまでもない。

- 本会議総括ののち、立候補した参加者4名によるスピーチが行われた。以下はスピーチからの抜粋。
- 私たちはもっと対話をしなければならない。コミュニケーションは非常に有用なツールであるから、未熟な私たちはこれを身につけ、他者を尊重するという美德を持ち合わせる必要がある。相手の立場になってはじめて理解するということができるのだと考えさせられた。
- フォーラムが非常に綿密に設計され、とても充実した時間を過ごすことができた。実際にフィールドワークに行き、日本におけるLGBTQ+をはじめとするコミュニティの状況を知ることができてよかった。
- 何度も国際会議に参加しているが、まったく次元が違った。参加者のレベルも高く、とにかく多様なバックグラウンドをもった人と濃密な時間を過ごせて刺激的だった。
- コミュニティと文化の機能、目的を理解するためにはGNLFのような相互理解に焦点を当てたフォーラムが必要だと感じる。現在のコミュニティを取り巻く状況を念頭に、これからの将来を形作る知識を得ることができたと思う。

スピーチ後はひとりひとりに参加賞が授与された。閉会後は集合写真を撮影し、しばらく参加者同士で歓談し和やかな雰囲気ですべての参加者は閉幕した。



3-9 参加者の声

[フォーラム全体を通して学んだこと]

- ディスカッションに積極的に参加することの大切さ
- それぞれの国の実情・現状
- ディスカッションで結論を出すこと、その難しさ
- 良いディスカッションをするために良いトピックを見つけること

[家族パート セッション1（子育て）感想]

- それぞれの国のライフスタイルを知ることができ興味深かった
- 国ごとに虐待としつけについての考え方が違うことを知れた
- ポスターセッションをするまでもなかった、話し合いだけでよかった

[家族パート セッション2（様々な家族形態）感想]

- 国により同性婚の受け入れ状況が異なり、知識を深めることができた
- 質問の数が多く、一つ一つの質問について深く話し合う時間がなかった

[家族パート セッション3（家族の再認識）感想]

- 家族やそれを支えるコミュニティ、システムを再認識するきっかけになった
- 一部質問が不明瞭だった

[社会パート セッション1（学校）感想]

- 国ごとに異なる学校のシステムが学べ興味深かった
- 学校の問題は世界中で常に難題であるためそれを深くディスカッションでき、充実した
- 教育を変えることはできないため興味がわかなかった

[社会パート セッション2（多文化理解）感想]

- 多様な国籍、背景を持つ人が共に暮らすコミュニティについて話し合うのは興味深かった
- ケーススタディなど具体性のあるトピックを用いて話し合いができ楽しかった
- 同じような内容を何度も行っていた

[国パート 感想]

- ロールプレイやエッセイを読み歴史比較をするアクティビティはやり方がよく楽しかった
- ロールプレイを通して世界的な問題の解決方法を得る難しさを学んだ

[ファイナルセッションの感想]

- 深いディスカッションだった
- もっとディスカッションの時間が欲しかった

4-1 会計報告（収入）

参加者費			
参加国・地域	参加費	人数	小計
キルギス	\$700	2	¥152,180
スロバキア	\$700	4	¥304,696
チュニジア	\$700	3	¥228,522
パキスタン	\$700	5	¥381,220
ハンガリー	\$700	2	¥152,908
ブルガリア	\$700	3	¥228,522
メキシコ	\$700	3	¥228,690
中国（台湾）	\$700	1	¥76,230
日本（一般参加）	¥30,000	3	¥90,000
日本（運営）	¥30,000	14	¥420,000
	小計	40	¥2,262,968
助成金収入			
財団名			収入
公益財団法人 平和中島財団			¥300,000
公益財団法人 三菱UFJ国際財団			¥300,000
	小計		¥600,000
企業協賛収入			
企業名			収入
三菱商事株式会社			¥500,000
株式会社PR Table			¥7,700
	小計		¥507,700
寄付金収入			
団体名			収入
クラウドファンディング			¥41,500
	小計		¥41,500
当期収入合計(A)			¥3,412,168
前期繰越収支差額			¥31,893
収入合計(B)			¥3,444,061

4-2 会計報告（支出）

旅費				
A.海外参加者渡航費				
参加国・地域	人数	補助額(USD)	補助額(JPY)	費用
ブルガリア	3	\$820	¥90,052	¥270,157
キルギス	2	\$545	¥59,852	¥119,704
メキシコ	3	\$1,045	¥114,762	¥344,286
パキスタン	5	\$660	¥72,481	¥362,406
スロバキア	4	\$590	¥64,794	¥259,175
チュニジア	3	\$730	¥80,169	¥240,506
ハンガリー	2	\$590	¥64,794	¥129,588
中国（台湾）	1	\$585	¥64,245	¥64,245
	小計	23		¥1,790,066
B.日本国内旅費				
項目				費用
成田空港出迎え・送り出し				¥35,420
羽田出迎え				¥8,930
	小計			¥44,350
食費・宿泊費				
A.宿泊費				
項目				費用
オリンピックセンター				¥883,980
	小計			¥883,980
B.食費				
項目				費用
食事代				¥108,000
	小計			¥108,000
研修会場費				
項目				費用
オリンピックセンター				¥43,690
文化交流会				¥129,999
	小計			¥173,689
雑費				
項目				費用
謝礼				¥15,336
通信費				¥89,324
新聞購入費				¥54,000
備品				¥87,406
印刷代				¥63,600
感染症対策特別支出				¥57,587
その他雑費				¥47,500
	小計			¥414,753
当期支出合計(C)				¥3,414,838
次期繰越金				¥29,223

5-1 連絡先

本報告書に関するお問い合わせは、下記GNLF学生本部連絡先までお願い致します。

[住所]

〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-6 アトラスビル6階 IBIC本郷内

[公式ホームページ]

<http://jp.g-nextleaders.net>

[メールアドレス]

gnlf-hq@g-nextleaders.net

[団体Facebookページ]

<https://www.facebook.com/GlobalNextLeadersForum/>

[団体Twitter]

@GNLFjapan